

二〇二二年度
晃華学園中学校

第二回
入学試験問題

【国語】

時間…四〇分
配点…八〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

こんなできごとがあった。

六年生の秋、修学旅行の遊覧船の上のことだった。

十和田湖は深い透明なみどり色で、湖に浮かぶ小島を覆う紅葉は、目にしみるほど美しかった。めったに旅行をしない私にとって、修学旅行といえど大旅行であり、そのための興奮も手伝って、私はほとんど放心のいで目に映るすべてのものに見とれていた。カメラのシャッターをきるのもどかしく、何かをいうのもしらじらしいくらい、それらは美しかった。

「ねえ小田桐さん、きれいじゃない？」

手すりにもたれて景色に見とれていた私に、クラスメートが話しかけてきた。私はわれに返って周囲を見た。クラスの親しい女子数人が、いつのまにかそばにきていた。

「さっきから黙ったままね。感動しないの」

「え……」

直截な質問に①思わず失笑しそうになって、あわてて口をひきしめた。

『感動しないの』という質問ほど、愚かなことはなかった。しかし少女たちは平気でしゃべりはじめた。

「ほんときれいよねえ。絵ハガキとは比べものにならないわ」

「やっぱり自然はいいわね」

「さっき、あの小島を通り過ぎたとき、あんまり紅葉がきれいなんで私泣けちゃったわ」

「あーあ、カメラ持ってくればよかったわ。こんないい景色、写真にしなきゃもったいないわ」

②みんなは口をきわめて称賛した。

確かにそのとおりだった。鳥々はきれいで、空を飛ぶ水鳥は牧歌的だ。絵ハガキではみられない、一瞬一瞬のあでやかさがある。自然はいい。

しかし私は、みんなに同調しなくなかった。美しいものを美しいというのはよいことだ。しかし、私は少女たちの態度の中に、なにかしら仰々しいもの、つまり嘘を感じた。

「きゃあ、湖って深いところはモスグリーンなんだわ」

「ステキよねえ、小田桐さん。そう思わない？」

「え……ええ……」

自分の考えとは正反対の、^③口をついて出た同意の返事に、私は唇をかんだ。

「こんなところで、ずっと暮らしたら最高ね。毎日毎日、湖をみて暮らすの」

「あ、みてみて、鳥よ。なんて鳥かしら」

「感激だわあ。あ——、風まできれいにみえちゃう」

みんなの歓声はやまなかった。私は耳をふさぎたかった。^④周囲の景色が、しだいに色褪せたものに感じられてきた。

そうじゃない。

湖は美しく、風はおだやかで、すべてが輝いているけれど、それは……それはいつてはいけないことなのではないか。口に出したときから色褪せてしまうそれは、どこか、もっと奥深いところで受けとめ……抱きしめてから……ようやく言葉になる……それほどに柔らかなものではないか……。

私はいおうとした。考えのまともらぬまま、何かをいおうとしたのだ。

「うるさいな」

ふいに割りこんできた声があった。大声でしゃべりあっていたみんなは、ぴたりと話すのをやめ、ふり返った。

長い髪を風になぶられながら、彼女が立っていた。ばかにしたような目で、私を含めた少女たちの群れを見ていた。

「ど……どうということよ。うるさいって」

ひとりごと、とまどいながら反論した。

a

b

c

少女たちは一対数人の数に頼んで、雄々しく彼女に立ち向かった。彼女はふんと鼻を鳴らして、ひとりの少女を見た。

彼女にそういわれた少女は思わず一歩退いた。

「な、なによ。ひねくれた人ね。柳沢さんて」

「そうよそうよ。柳沢さんは、きれいなものに感動しないのよ。男の子みたいに乱暴なんだから。きれいなものがわからないのよ」
みんなは口ぐちにそういった。

私は黙ったまま、手すりを握りしめて、彼女をみつめていた。彼女は風になぶられて頬に貼りついた髪を勢いよく払いのけた。色白の肌にとと赤みがさし、きつい目で私たちを見すえた。

「あなたたち、本気できれいだと思ってるの？ べちゃべちゃとしゃべりまくってて、感動とやらをするひまがあるの？」
彼女は鋭い語気で素晴らしい放った。矢のように鋭い言葉。それはまさしく矢だった。人の心をえぐる矢。

ぬ矢。
I にしか当たら

私がいいいたいと思っていながら、口に出せなかったその言葉をいい放った美しい少女は、ひとりの味方もなく、ただひとりで数人の少女たちを睨みつけ、また十分みんなを恐れさせた。

みんな目交ぜをした。

「あっちへ行きましょうよ」

「そうね」

みんなは逃げるように彼女のそばを離れ、船室にはいって行った。

私はおどおどしながら、みんなのあとを追うべきか、その場にとどまるべきか迷っていた。彼女は残った私を見て、一歩近づいた。

「あなたは、向こうへ行かないの？」

「あの……」

「本当にきれいなね、感動しちゃうわ、私涙が出てきたわ……だつてさ」

彼女は薄ら笑いを浮かべながら、茶化すようにつぶやいた。私はうつむいた。

「あの……あたし……あたし、きれいだと思うのよ……」

どもりどもりそういうのがやっとなった。

彼女は、ずっと私の横にきて、手すりにもたれた。私のいったことなど、聞こえてないかのようだった。じっと、湖の底をみつめていた。見えないものを見ようとするような、何かにそっとさぐり入り、すべり込むような、鋭さと優しさのまざった視線は、長いこと湖から離れなかった。

やがて身をそらし、背筋を伸ばして私を見た。その表情はすべてに勝っていた。

どのような表情だったか、説明することはむづかしい。花笑み、というのであろうか。柔らかな、内に向かってゆく笑みが口元にあった。だれかに見せるためのほおえみではなく、自然と湧き上がるほおえみ。そんな美しいほおえみを、かつて私は見たことがなかった。静かな、深い感動がそこにあった。軽やかで浮気な少女たちの騒がしい称賛に、反発せざるを得なかった真摯な想い。

だが、それは何よりも危険な兆候だった。その危険さを本能的に感じとり、注意深く芽を摘みとっていた私は、自分を恥ずかしく思いつつも、彼女の純粹さを懸念した。

⑤ 純粹さは、ときに残酷な毒となる。

人びとは毒を好まない。うとんじ、避け、やがては憎むようになる。いまさっきのように。

(氷室冴子『さようならアルカン／白い少女たち 氷室冴子初期作品集』)

問一 —— 線部①「思わずひきしめた」とありますが、これはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 景色に夢中になったことを後悔して、少女たちの話の輪に入ろうとしたということ
- イ 少女たちの言葉にあきれてしまったが、それをさとられないようにしたこと
- ウ 愛想笑いをして済まそうとしたが、真面目に答えようと考え直したということ
- エ 少女たちが話しかけてきたことに戸惑い、自分だけの世界に入ろうとしたということ

問二 —— 線部②「みんなはく称賛した」とありますが、これは少女たちのどのような様子を表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 一人一人が、思い思いに勝手なことを言っていて騒いでいる様子
- イ 賢さをひけらかさそうとして、難しい言葉を使って喜んでる様子
- ウ 興奮して、互いに競い合うように様々な言葉でほめてる様子
- エ 様々な言い回しの中から、その場にふさわしい言葉を選んでる様子

問三 —— 線部③「口をくかんだ」とありますが、この時の「私」はどのような気持ちですか。次のア～エの中から最も適当なものをを選び、記号で答えなさい。

- ア 少女たちにはつきりと答えられなかったことを残念に思っている
- イ とつさに少女たちに合わせてしまったことを悔しく思っている
- ウ 少女たちを放ってほんやりしていた自分に腹を立てている
- エ 親しくしている少女たちに本音が言えない自分がかっかりしている

問四 —— 線部④「周囲のく感じられてきた」とありますが、この時の「私」はどのような気持ちですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 少女たちが景色をほめる言葉を次々に口にするので、それらが理解できずに混乱している
- イ 少女たちが平気で嘘を重ねるせいで、目の前の景色がまるで偽物にせものになってしまったように感じている
- ウ 少女たちの言葉に振り回されて、落ち着いて景色を見られずにいら立っている
- エ 少女たちが安易あんいな言葉を使うせいで、景色の美しさが失われていってしまうように思っている

問五 a 〃 d に入る適当な会話を、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 「そうよ。ものごとくに感動するのは大切なことだって、先生もいつてたわ」
- イ 「きれいだからきれいって言って、何が悪いのよ」
- ウ 「あなたは先生にいわれたから、感動するの」
- エ 「うるさいからうるさいってのよ。きれいきれいと、ばかのひとつ覚えじゃあるまいし。少し黙ったらどう？」

問六 —— 線部A「赤み」くD「優しさ」の中で、働きの異なる言葉はどれですか。AくDの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問七 I に入る言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 敵 イ 正義 ウ 真実 エ 無意識

問八 —— 線部⑤「純粹さはくなる」とありますが、ここでの「毒」とはどのようなものですか。十字以内で答えなさい。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。ただし、図2-1は省略してあります。

寺子屋を贈る活動が始まった

バン格拉デシユが独立して一〇年後の一九八一年の非識字率は七一%、一〇人のうち七人が、読み書きができなかったということだ。その頃、日本キリスト教海外医療協力会（JOCSS）主事の船戸良隆は、バン格拉デシユをたびたび訪問し、ミナ・マラカールという女性の医師と出会います。そして何度か話し合ううちに、二人は「医療はもちろん大事だけれど、その前に病気にかからないようにするために教育が必要で、そのためには I 」ということだ、意気投合しました。

ミナ・マラカールは医師として病院に勤務していましたが、 II ことに、治療のみでなく、病気にかからないようにする予防医学の必要があることを感じ、村の中で地域医療の一環として保健教育を始めました。村の女性たちを集め、石けんで手を洗うこと、下痢の時にはサライン（経口補水液）を作って飲むことなどを指導したのである。

ところが読み書きのできない人々はメモができないので、耳で聞いてわかったつもりでも、家に帰るとサラインの作り方の記憶が曖昧となり、水の量はどのくらいだったのか忘れてたり、塩と砂糖の割合を反対にしまったりということが起きました。

また、「石けんで手を洗いましょう」と言っても、貧しい家庭ではその石けんを買うことができません。そこで村の女性が手に職をつけて、少しの収入を得て家庭内での保健衛生に役立てるようにしました。ある時、マラカールは村の女性に尋ねました。「あなたはこの内職でお金を得たら、まず初めに、何に使いたいの？」女性は何のためらいもなく、「子どもを学校にやりたい」と答えたそうです。 ① マラカールは心を動かされました。「すべての援助、協力も、それを受け入れる側に基礎がなければ、すべての努力は無駄になってしまいます。今必要なのは教育です」と確信し、初等教育、母親教育を行い、基礎から国づくりをしていく計画を立てました。

一九九〇年、ダッカ市郊外のスラム地区において、ミナ・マラカールによって学校に上がる前の教育をする幼稚園が始まりました。第一章でも触れた通り、農村地域では児童婚の慣習も残っているため、III。早婚は人口増加の一因ともなり、低年齢での出産は、死産あるいは乳児死亡率が高い原因でもありました。そこで、医師であるマラカールは、貧しさのために勉強を続けることが困難な中学生の女子を選んで幼稚園教師とし、就学前の子どもたち一五―二〇人を集めてひとクラスとして、幼稚園を始めたのです。

教師となった女子はその給与で中学校に通うことができようになりました。それは婚期を三―四年遅らせることにも貢献しました。就学前の子どもたちには、生活指導を含めた読み・書き・計算などの基礎知識を教えました。スラム地区、農村などの、そのままでは小学校に行かない子どもたちに、小学校に行く心の準備をさせるのです。

これは、サンフラワー教育計画(Sunflower Education Program: SEP)と呼ばれました。SEPが始まった翌年には小学校も開校し、ダッカ市郊外のガジプール県の農村でも、少しずつ学校の数が増えていき、北部のジャマルプール県、南部のポリシャル県、と年ごとに活動地域も広がっていきました。

こうしてSEPはスラム地区で幼稚園と小学校を作る組織として始まり、その他の地域にも活動を展開することになりました。一九九九年、バングラデシュで国の認可を得るため、SEPを推進するマラカールのグループはNGO登録をし、その際に組織名称をBDP (Basic Development Partners) としました。

この呼びかけに答えて

BDPのミナ・マラカールの呼びかけに答えて、日本においては船戸良隆が中心となり、一九九〇年一〇月にACEF (= Asia Christian Education Fund) アジアキリスト教育基金) が設立されました。

この二つの団体は援助するもの・されるものの関係ではなく、② 共に働く対等の関係です。いわゆる慈善的な姿勢は、いつも与える側が受ける側の上に立ち、上下関係を作り出します。このような関係では結局、与える側はいつも安全地帯にいて、自分に余ったものを「かわいそうな人たちに恵んであげる」ということになります。そして何か良いことをしたというような自己満足に陥ってしまいます。

このような姿勢が高じると、

IV

IV という奇妙な関係となります。

実際に、日本のマスコミがバングラデシュで取材する際、現地の方々に「もっと貧しいところはないですか? もっと悲惨なところを撮りたいのですが」と言ってひんしゆくをかった

という話を聞きました。

こうした姿勢は、受ける側にも良い影響を与えません。最も問題のある例を挙げれば、受ける側が「あなたたちは、私たちが貧しくなくなったら困るのではないですか？」と言うに至り、自立の精神を失わせてしまいます。ミナ・マラカールは、「ACEFが私たちのスポンサーではなく、コワーカー（協働者）であるということこそ、私たちにとって最も嬉しいことです」と、日本からのスタディツアー参加者にいつも語っていました。

ACEFは二つの大きな目的を掲げました。一つは「バングラデシユに寺子屋を贈ろう」というBDPの活動を支援することです。もう一つは、「アジアの諸問題に積極的に取り組む青年を育成すること」です。そのためにも、年に二回、日本からのスタディツアーを実施し、バングラデシユの生活を体験しつつ、私たちの生活を見直すきっかけにしたいと考えました。また年に二回セミナーを開催し、アジアの一員として私たちはどうあるべきかを考える機会を提供しました。セミナー参加者の中からは、スタディツアー参加者も生まれ、以後のACEF活動に積極的に関わる会員が育っていききました。

また発足当時より、誰もが参加できる運動として、アルミ缶回収を広く一般に呼びかけました。アルミ缶を集めることで得た収益により、バングラデシユの子どもたちが学校で勉強できるとの説明は、具体的に理解しやすく、日本の各団体、幼稚園、学校等で多くの協力者を得ました。ACEF事務局でも事務所の入っているビルの一階にスペースを借り、アルミ缶回収箱を並べ、たまると足で踏み潰して、大きな業務用アルミ缶回収袋に詰めて積み上げ、二〇袋ぐらいたまると、リサイクル専門業者に回収してもらい、現金を得ていました。その後アルミ缶の価値はどんどん下がっていききましたので、やむなく事務局での回収は閉鎖しました。

一方、スタディツアーで何回かバングラデシユを訪れた時、きれいな刺繍をしたカードを何枚か購入したところ、日本でたいへん喜ばれました。それをきっかけに、バングラデシユの女性が刺繍した刺繍製品を、日本の会員・寄付者に買ってもらい、その収益を、BDP小学校の子どもたちのために使ってもらおう、というバザー計画が発案されました。バザー委員会もでき、毎年仕入れをして、全国のキリスト教系の幼稚園、小学校、中学校、大学等の文化祭などでも、ACEFの活動とともに紹介され、広がっていききました。

バングラデシユの刺繍はとても細かい糸で細かく手で刺したもので、日々の暮らしの様子が描かれ、布一面に刺し子のように縫い取りがされています。バングラデシユの伝統的刺繍技法でノクシカタと呼ばれており、小物から大きなベッドカバーまで手仕事の作品は多種あります。その反面、最近では学校教育が浸透してきたので刺繍をする女性が減少し、刺繍製品の値段が高騰しています。

お母さんたちも学び始めた

さて、ミナ・マラカールらの教育活動が始まった翌年の一九九一年より、母親識字学級（文字の読み書きを学ぶ）も始まりました。一度も学校に行つたことがなく、字の書けなかつたお母さんが、赤ちゃんを抱きながら、または小さな子どもを連れて、一生懸命学ぼう姿には感動しました。

最初の頃は、日本人（ACEFスタディツアー参加者）の訪問があると緊張して、あるいは、読み書きができないことに恥じらいがあったのか、お母さんたちは何となく硬い表情だったのですが、毎年日本人が訪れることにも慣れてきたのか、だんだん表情も明るくなっていきました。

そんな頃、お母さんたちの輪の中に入って、一緒に座ってみました。^③使われている教科書はとても興味深いものでした。文字を一つ一つ覚えていくことと同時に、家族の健康管理、栄養のことなどが学べるカリキュラムになっていました。バングラデシユでは目の病気がたいへん多いので、それを防ぐために緑の野菜を食べること、病気を防ぐために家をきれいにすることなど、絵と文章で説明がされていて、そこで使われている文字を一つずつ覚えていくのです。

文字を覚えることから始まり、なぜ野菜を多く食べなければならないのか、なぜ家をきれいにしなければならないのか、なぜ村人たちは助け合っていかなければならないのかを一緒に考え合うことによって、村全体が明るい家庭の集まりになっていく、そんな印象を受けました。「家の中が幸せであれば、子どもは笑うようになる」（図2-1）という絵と文章もありました。

また、よく一人ひとりを見回すと、まだ母親になっていない若い女性たちが混ざつたクラスもありました。今まで一度も学校に行つたことがなく、やっと村で小さな学校が始まつたけれど、小学生のクラスには少し恥ずかしくて入れないという人たちでした。一九歳のアツタルさんと一二歳のニルパさんは、自分の名前が書けるようになったと、私のノートにゆっくりとベンガル文字で名前を書いてくれました。文字の読み書きから視野が広がり、彼女たちの世界が広がっていくことを願いました。

またモエジャンさんというおばちゃんも学んでいました。五人の息子さんはみな結婚して、夫と二人暮らしですが、息子さんたちはみな近くに住んでいますから、お孫さんたちといつも一緒です。「今までは、読み書きができなかつたけれど、今では、孫の勉強も助けられるようになったのよ」と嬉しそうです。「自分の名前が書ける人！」との先生の声に、一番に立って、前の黒板に大きく名前を書きました。大きな木の下の青空教室なので、まわりには村中の人々が集まり、大勢の目が見つめる中、モエジャンさんは少し恥ずかしそうでしたが、顔は誇らしげで輝いていました。「手紙も読めるの？」と尋ねると、教科書の手紙についてのページを広げ、「ちゃ

んと習ったから、私に手紙を書いて！」と、私のノートに名前を書いてくれました。

この母親識字学級は六年間続きましたが、村の女性たちが一通り簡単な読み書きができるようになったので、役割を終えて閉鎖されました。

(西村幹子、小野道子、井上儀子『SDGs時代の国際協力 アジアで共に学校をつくる』)

問一 I I IV にはどのような内容が入りますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

I ア 慈善団体による持続的な援助が必要である

イ 将来母親になる女子の初等教育が必要である

ウ 医師になるためのエリート教育が必要である

エ 寺子屋で教育できる母親の育成が必要である

II ア 同じ病気の人が何人もやって来る

イ 医療従事者も病気になってやって来る

ウ 同じ人が何度も同じ病気で行って来る

エ 読み書きのできない人が何人もやって来る

III ア 特に女子に対する教育は軽視されがちでした

イ 親から農業を引き継ぐ子どもに教育は不要です

ウ 貧しい家庭では子どもに教育を受けさせられません

エ よりいっそう小学校で予防医学を学ばなければなりません

ア 与える側と受ける側が、上下関係なく対等に関わる

イ 与える側の慈善的な姿勢は、受ける側の自立の精神を育てる

ウ 与える側が安全地帯にいるせいで、受ける側は貧しいままである

エ 与える側は、受ける側が貧しければ貧しいほど満足感を得られる

問二 —— 線部①「マラカールはく動かされました」について、このことから「マラカール」はどのような思いを持つようになりましたか。次のア〜エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 読み書きができない村の女性に、家庭内の保健衛生の話をしてあまり理解できていないことを知り、地域医療の一環として保健教育の必要性を感じた

イ 貧しくて石けんすら買えない母親でも、子どもの幸せを思っただけで教育を一番に望んでいることを知り、教育によって人々の生活を向上させようと決意した

ウ 村の女性が少しの収入を得ても、石けんを買うのではなく子どもを学校にやらせようとしているのを知り、子どもの下痢は半分減りそうもないと確信した

エ 読み書きができず、石けんも買えないような人生を歩ませたくないと思う母親が、子どもの教育に期待しているのを知り、医師よりも教師の仕事に希望を見いだした

問三 —— 線部②「共にく関係」について、このような関係にある人々を何と言いますか。本文中から五字以内でさがして書きなさい。

問四 —— 線部③「使われているく興味深いものでした」とありますが、この「教科書」を使うことで村にはどのような変化が見られるようになりましたか。次のア〜エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 読み書きができないことを恥じていた女性たちが、文字を学ぶことで外国人の訪問があっても緊張しなくなった

イ 今まで一度も学校に行ったことがない人でも自分の名前が書けるようになることで、視野が広がり村から出ていった

ウ 文字を覚えることが、健康や栄養、村のあり方について考えることとつながり、村全体が明るい家庭の集まりになった

エ 読み書きができるようになった母親が、自分の子どもも学校に連れてくるようになり、村の若い女性も学ぶようになった

問五 次のア～オについて、本文の内容として適当なものにはA、適当でないものにはBで答えなさい。ただし、すべて同じ記号で答えてはいけません。

- ア マラカールは貧しさのために勉強を続けることが困難な女子を集めて、幼稚園で基礎知識を学ばせた
- イ SEPはバンングラデシュで国の認可を得るためにNGOとなり、BDPに名前を変更した
- ウ アルミ缶回収によるバンングラデシュ支援は、セミナーやスタディーツアーの参加者によって始められた
- エ 学校教育の浸透によって手作業で刺繍をする女性が減り、刺繍製品の値段が上がった
- オ モエジャンさんは、船戸良隆に「手紙を書いて！」と言って誇らしげにノートに名前を書いた

三 次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ゲンセンから水をくむ
- ② ベツカクに扱う
- ③ やけどの応急シヨチをする
- ④ トウシユによる討論
- ⑤ シンシヨウボウダイに話す

